

# 史料報

第 42 号

昭和60年3月

## 近代史料における私文書について

——その価値と保存——

海野 福寿

(明治大学文学部教授)

官公文書にたいする私文書といわれる領域は非常に広いが、ここではふつうの庶民の家にも残っている、しかし学術史料としての価値が確定していない私文書について考えてみたいと思う。それらの史料は、今後の歴史学が社会的な側面や民衆史的な側面を深めていくならば、無視することができない素材であろう。

もつとも、日本近代の私的史料は乏しい、という指摘もある(丹羽邦男「近代史料論」八岩波講座「日本歴史」別巻二、昭和五一年V所収)。近代における自由な個人の未成熟、国家権力による言論・思想の強い規制がその理由である。確かに、この指摘の一面は否定できない。しかし、江戸時代にくらべるならば、質的に

も、量的にもすぐれた私的史料が存在することも事実である。経済社会の発展と近代的な教育・通信・交通などの発達によって、人びとの行動半径は広がり、情報交換量が拡大した。それを伝達したり、記録したり、出版することを必要とした近代社会は、膨大な文書を生み出したのである。現在の私たちの身辺をながめると、文書・文献はほとんど無尽蔵といつてよいほど氾濫している。

その膨大な文書の山から、どれが保存する価値のある史料であり、どれがたんなる生活の残滓なのか選択することは、かなり難しいことに違いない。身近な例だが、先ごろ私の勤務する明治大学文学部で「五十年史」が編纂された。当然のことなが

### 目次

- 近代史料における私文書について 海野 福寿……………(1)
- 史料所在調査報告……………(4)
- 「依田長安一代記」の刊行……………(6)
- 「全史料協」に期待すること……………(7)

- 第一〇回史料館国際会議ボン一九八四と研修セミナー 安澤 秀一……………(8)
- 昭和五九年度新収史料紹介……………(10)
- 受贈図書……………(12)
- 集報……………(16)

ら十数年前の「大学紛争」についても述べられなければならないかった。

編纂委員長は、教授会メンバーに、当時配られた学内資料・ピラなどの提供を求められた。ところが、ほとんどの教員が何も保存していなかった。私もその一人である。あれほど多くの「文書」を受けとったはずだが、「紛争」が一段落つく頃には紙屑籠へ行ってしまったのである。そればかりではない。さまざまの行事・委員・授業などに関する記録類も個人の手許に残っていたものは非常に少なく、編纂は難航した。私たちは歴史家として不明を恥じねばならなかった。

そうはいっても、前近代の文書のように、残っているものすべてを保存すべきである、という意見は実際的ではない。個人の収蔵能力はたかが知れているし、図書館・図書館などでさえ、整理・保存の限界は目に見えている。もし無制限に受け入れたならば、ただちに書庫は文書で溢

れるだろう。

したがって、保存すべき文書の価値基準の明確化が求められるわけだが、現在の歴史学(近現代史)がその眼力を持ちあわせているとは思われない。この点については後にふれるとして、さしあたり近代私文書の中で是非残しておきたい史料として以下、いくつかの例をとりあげることにしよう。

まず第一は日記である。平安時代の昔から有名な日記が数多いが、近代史においても第一級の史料として知られている多くの日記がある。たとえば、明治初年では「日本史籍協会叢書」(東京大学出版会)には、「大久保利通日記」、「木戸孝允日記」、「広沢真臣日記」をはじめ、皇族・公家の日記が収められているし、明治—大正期の「原敬日記」(乾元社、福村書店)も有名である。昭和戦前では「西園寺公と政局」(岩波書店)として知られる原田熊雄日記や「木戸

幸一日記（東京大学出版会）。他にも多数の政治家の日記が公刊されている。また、作家では永井荷風「断腸亭日記」（岩波書店）や「高見順日記」（勁草書房）など文学的評価の高い日記もある。徳川夢声「夢声戦争日記」（中公文庫）は戦時下の庶民生活を活写して興味深い。

しかし、これら有名人の日記だけに価値があるのではない。無名の、庶民の日常を書き残した無数の日記が日の目を見ることなく埋もれているに違いない。明治期の日記の書き手は、地方でも上層の人たちに限られるが、次第に一般にも普及したようである。学校教育がこれに拍車をかけたことも否定できない。私たちも一再ならず日記をつけ始めた経験をもっている。

管見のかぎりではあるが、庶民日記の白眉は「相沢菊太郎日記」であろう。相沢は神奈川県高座郡橋本村の在村小地主。明治三〇年から大正九年まで相原村の助役・村長をつとめた。その彼が明治一八年一九歳の時から、昭和三十七年九六歳で没する一〇日前まで、七八年間にわたって一日も休むことなく書き綴ったのがこの日記である。一部は活字に付されたが全体は未公開で、小本新造「あ

る明治人の生活史——相沢菊太郎の七十八年間の記録——」（昭和五八年、中公新書）が抄録的に伝えている。著者のコメントが不適切なために興味をそがれるのが残念であるが、日記は、相沢の身辺に起こるさまざまの事がらを詳細に、とりとめもなく述べている。その、とりとめのない感じがいい。たとえばつぎのような――。

村長としての相沢が、伝染病が発生すると駐在巡査と一緒に消毒器具をもって出かけ、患者を隔離病舎に収容したり、列車飛びこみ自殺があれば、深夜でも巡査と現場に急行する勤勉ぶりとか。家庭人としての相沢が、病弱の妻をやさしく看病し、その死後は再婚もせずに子どもたちを育て、夜泣きする二歳の末娘を背負って庭先を徘徊し、困り果てたとか。長男の入学試験には人力車に乗して付添ったとか。それなりの資産家だった相沢家でも、日常の生活は質素で一汁一菜。暮から正月にかけては台所に縄づりされた塩鮭を切って梅干を添えて食べたとか。生涯のうちただ一度、横浜の外人貿易商の招待で洋食を食べ、フィンガーボールの水を飲むものかどうか、同伴の役場吏員と相談した話とか。結

婚式のため初めて洋服を新調した代金が一六円だったとか。大正天皇即位大札の賜饌が横浜公園で行われた時、紋服装用のため入場できなかったこととか。毎日の生活が事こまかに、淡々と記されているのである。

「相沢菊太郎日記」がすぐれているのは、七八年間にわたる継続性と同時に、日常生活の細部を書きこんだ記録性にある。

身近生活を日記にしるすことは、江戸時代にはあまりなかったことで、明治以降次第に一般化したのだから、やはり近代の所産だろう。しかし、なお天候や来客などの記録が中心で、私事にわたる部分は薄く、依然、事務日記風の記述が多く、それについての筆者の判断、思考は控え目で、個人の意見や感情を読みとりにくいのがふつうの日記スタイルである。

これは「自由な個人の未成熟」の問題というよりも、「他者の目」を意識しているためである。日記には自己正当化、不都合な事実の抹殺などが常である。日記は主観的自己了解の上に成り立っている。

第二は書簡。秘密性の高い史料という点では日記と同じだが、日記がしばしば筆者の主観や事実の歪曲をともなうのに対し、書簡は、一定の

状況で特定の人に対しては事実を伝え、真情を吐露する場合がある。そうした重要書簡は受取人の手許に保存されることが多い。ただし史料利用者としての私たちが、それらの書簡に接しても、差出人と受取人との関係を的確に把握することはかなり困難で、他資料とのつき合せが必要となる。また書簡は、受取人側しか保存されないから一方的である。なかには差出した書簡の控をとっておく人もいないわけではないが稀で、あらかじめそれを期待することはできない。あるいは書簡には「年」が欠落していることも間々あり、郵便局スタンプでもないと作成時期を確定できないという難点もある。しかし、電話で要談を済ませ、物的証拠を残さない現在とくらべると、有力な史料であることは間違いない。

第三は、文書ではないが写真あげよう。一般家庭でもつとも意識的に保存されるのは写真アルバムだろう。明治期からのさまざまの記念写真・肖像写真。大正末期以降はスナップ写真も加わる。さらに印刷された写真帖、絵葉書などもあり、また、商店などの宣伝映画、戦地慰問用の戦後映画なども見逃せない。これらを地域的にまとめ、構成すれば、生

活史の領域は一層拡大される。

なお、各新聞社には新聞掲載写真の一部が整理・保存されている。保存量が多とも多いのは毎日新聞社で、東京本社だけでも一〇〇万枚の写真があり、情報サービスセンターで公開（ただし有料）されている。他社でも公開化の方向にあるから利用希望者は問合せればよい。戦前のニュース映画にも意外な掘出し物があるから関心をもつ必要があるだろう。

第四の家計簿は、生活の痕跡を鮮かに示す史料である。大正末年のサラリーマン家庭の増大を背景とし、婦人雑誌などの家計やりくり特集に乗って普及したようである。平凡社編集部編『ドキュメント 昭和世相史・戦前篇』（昭和五〇年、平凡社）には、昭和初年の「婦人之友」に掲載された二例の家計記録が収録されている。一つは一家五人暮らしの大工もう一つは四人暮らしの陸軍配属将校の家庭である。どちらも東京。前者の場合は収入四〇円に対し支出五三円の赤字家計。支出の内訳は住居費一一円、食費一七円、調味料三円、燃料二円、被服費など一三円、教育費五〇銭、職業費五円が細目ごとに記入されている。六畳と三畳の長屋

の家賃が一〇円というのが高いが、切りつめた食費・調味料が二〇円をこえるのはエンゲル係数の高さを示す。醤油を一カ月三升以上も使うのは野菜煮物を主惣菜にするため、食生活の内容がうかがえる。職業費や仕事着に気をつかうのも職人気質のあらわれといえようか。家賃はつねに滞りがちだという。このように都市小市民の消費生活の実態を伝えるのが家計簿なのである。

家計だけでなく農家経営費をふくむが、前述の相沢菊太郎は、明治二五年から昭和三二年に至る六六年間「金銭出入帳」を記帳していたことを付言しておこう。

第五は、伝記あるいは自分史の類である。有名人の顕彰的伝記や追悼録はここでははぶき、庶民に限るが、多くの人が自分は何であったか、あの人は何であったか、を書きとどめ、一生を総括したい願望をもっているように思われる。最近では、それが公刊される場合も少なくないが、ひっそりと書き残された自分史があったり、法事で故人の伝記を印刷した小冊子をいただくことがある。古島敏雄「子供たちの大正時代―田舎町の生活誌―」（昭和五七年、平凡社）は、著者の郷里、長野県飯

田町における大正期の生活体験を、非凡な記憶力と経済史家の観察力で再編成した名著であるが、市井人のかくれた名著も埋もれているのではないだろうか。手許にある数著の中から一例をあげれば、長谷川君江「春

風居三十年」（昭和五六年、非売品）。著者は彫刻家長谷川栄作夫人で、結婚後間もなく転居した東京・品川御殿山の「春風居」（家号）の、戦前から戦時下、そして敗戦後の三〇年をふり返って、昭和二四年に書き綴ったエッセイである。家庭婦人の目からみた親族や弟子たちの動静が中心だが、近辺の風物も歌うように描かれ、市民生活の移りかわりを写しとっている。小学校時代その近所に住んだ私は、時々読み返しては思い出にふけることがある。

このような書物は、各地域の図書館が集中して保存することが望ましい。

思いつくままに、私的史料のいくつかをあげたが、以上に尽きるものではない。では、保存する価値のある史料の線引きという、さきの問題にたち帰ると、やはり適切な解答が思い浮かばない。言えることは、創造的な歴史学習運動や研究活動が求

めている史料を残す必要がある、ということだけである。

先ごろ、子どもの遊びと街研究会編『三世代遊び場図鑑』（昭和五九年）という本を手にした。東京・世田谷太子堂に住む主婦・学生・若手研究者たち五人が、二年半かけて作り上げたという。遊びのフィールドとしての地域について、昭和初年に子供だった人、昭和三〇年ごろ子供だった人、そして現在の子供と、三世代一二人から聴き取った話をもとに、地図やイラストにあらわした楽しい図鑑である。現在の複雑な環境を考えるために、子供の遊びから街の変化を跡づけたのだった。

このような歴史学習運動が展開すれば、調査・編集過程で、聴き取りはもとより、古い写真・日記・作文などの記録や器具・道具などが求められることになる。思い出を残すだけの遺物に生命がよみがえり、史料として復活するのである。

人びとの研究・学習活動が、保存すべき価値ある史料が何であるかを指定していくのだろう、と私は思っている。

史料所在  
調査報告

近江国  
高島郡

在原区有文書ほか  
(現、滋賀県高島郡マキノ町)

本調査は、昭和五九年七月一六  
〜一八日の三日間にわたり、滋賀県  
マキノ町所在の区有文書を中心に実  
施した。調査は、京都文化短期大学  
教授藤田彰典氏、同助教授八木意知  
男氏、マキノ町史編纂委員河原喜久  
男氏を調査員に委嘱し、現地では同  
町史編纂室長青谷恭一氏をはじめ、  
関係各位にご協力いただき、当館か  
らは原島陽一、山田哲好が参加した。

今回の調査は、当館所蔵マキノ町  
役場引継書類の関連追跡調査を兼ね、  
町内の四区・一家で保管・所蔵する  
文書を対象に、調査総件数一八二二  
件に及んだ。

在原区有文書

当区は町の北部、標高約三〇〇米  
の盆地に古風な茅葺の家が点在する  
集落である。本文書は旧在原村庄屋

文書を引継いだもので、今回は六四  
一件(四〇〇冊、三六三通、三枚、  
二括)を調査し、その年代は元禄五  
年の割付状を上限に昭和四四年迄で、  
幕末以降が大半を占める。主な内容  
は、割付状が元禄五年、皆済状が宝  
永三年を上限に、共に約一〇〇通が  
残存し、欠年はあるものの当村の年  
貢高の推移を知る上での好個の史料  
といえよう。他には、拝借米・銀の  
貸付・返納、川除普請、浄土宗正法  
院の御忌・普請に関する史料が比較  
的まとまっている。さらに、近代以  
降の村費・区費の勘定帳簿が、つい  
最近迄作成され、区有文書として保  
管されている。

辻区有文書

当区は町の南西部にあり、旧辻村  
庄屋文書を中心に区が保管している。  
調査件数は四五三件(四四一冊、三  
三通、二五鋪、一括)で、年代は元

禄一一年、北隣の石庭村との芝取地  
争論落着手形を上限に、昭和二〇年  
迄。主なものは、諸入用打訳(割合)  
帳(天保一四〜明治八)、免割帳(天  
保一四〜明治七)、祠堂金取立帳(天

保二〜大正元)、地租改正時、及びそ  
の後の地籍編製に伴う諸帳簿、絵図  
類等が比較的まとまっている。また、  
江戸、京都、大阪への夫人足割合帳、  
海津宿への人足割合帳等。

寺久保区有文書

当区は町のほぼ中央に位置し、西  
部にはクリ園が造られ、秋にはクリ  
拾いで賑うという。本文書も旧寺久  
保村庄屋引継文書を主体にしており、  
調査件数三二〇件(四一冊、三〇〇  
通、一八鋪、一括)で、年代は承応  
二年から明治四二年迄。最も注目さ  
れるのは、欠年はあるが割付状が承  
応二年、皆済状が寛文四年を上限と  
して合せて二〇〇通残存する。訴訟  
文書では、元禄〜享保期の近隣諸村  
との山論、文政〜天保期の山年貢納  
方に関する史料があり、他には大川  
筋川除普請関係史料(宝暦一二〜明  
治元)がまとまっている。

牧野区有文書

当区は寺久保の北にあり、「往古の  
住民牧畜を業としたるより村名起れ  
り」とある。本文書も旧牧野村庄屋  
引継文書が主体で、調査件数二〇〇  
件(一二八冊、八三通、一括)で、  
年代は慶長七年から昭和五年迄であ  
る。慶長七年の検地帳は、他に町内  
の旧三ヶ村分が伝存しているので、

慶長検地の意義を分析する貴重な史  
料といえよう。その他、牧野村新田  
畑検地帳(寛文元)、田畑屋舗改書写  
(寛文六)等の土地帳簿や、明細帳(享  
保九、文化三、明治四)、上開田村と  
の山論訴状、願書、裁許状(享保〜寛  
保)がある。

大村家文書

大村家は旧白谷村の庄屋、戸長を  
勤め、現在は温泉民宿を経営しなが  
ら、江戸中期に建てられた茅葺合掌  
造りの旧家を民俗資料館として古文  
書類や農工具等を展示している。同  
家に一泊お世話になった折、ご当主  
のご協力により夕食後から深夜迄調  
査させて頂いた。調査件数一九八件  
(六冊、一九四通)で、享保九年の明  
細帳を上限に、炭焼争論、通行争論、  
山林講取極議定書等、貴重な史料群  
であることから、今回は予定外のた  
め一部分の調査に終ったが、全体調  
査を進められて万全の保存を期待し  
たい。

最後に、本調査につき、閲覧をご快  
諾下さった各区有文書保管者各位、  
並びに調査の協力・準備設営にご尽  
力を賜った藤田氏をはじめ、町史  
編纂室、教育委員会、ご協力下さっ  
た皆様にご心からお礼を申し上げる次  
第である。(山田哲好)

昭和五九年七月三〇日・三一日・  
八月一日の三日間で坂井修一氏所蔵  
文書の調査を実施した。

調査委員には長野県史主任編纂委員の塚田正朋氏、同常任編纂委員の古川貞雄氏を委嘱し、調査協力者としては信州大学教育学部日本史学研究室の卒業生・在学生有志などが参加した。すなわち中島佳明・井出千代美・田玉徳明・中村雅則・北村康彦・桜井かよ子・清水幸広・小山香織・滝沢公也・宮沢智栄子・山崎章光・関昌浩・橋詰文彦・森幹一・出河裕典・中山和己・酒井民子の十七名の諸氏である(順不同)。

当館からは森安彦・笠谷和比古・林宏保が参加した。

なお調査にあたっては、戸倉町史談会長柳澤和恵氏ならびに坂井家・坂井銘醸の方々にいろいろお世話いただいた。

坂井家は北国往還下戸倉村の名主役の家柄であり、安政六年(一八五九)の持高は一〇六石余であり、家号は「下の酒屋」とよばれ、代々酒造を経営し、現在も「坂井銘醸」とし

て存続している。今日でも往時を偲ぼせる茅葺の大きな家屋である。

坂井家文書は、酒蔵の二階の長持四、五棹の中にぎっしりとつめ込まれ、長い間眠っていたものであり、ほとんどが未公開文書である。その点数は優に一万点を越えるものである。しかし、年代的には、近世中期以降が大半である。これは、下戸倉宿が宝暦一〇年(一七六〇)七月初旬の大火で五〇軒余りが焼失したさい、坂井家も類焼したためである。

それにしても、坂井家文書は近世文書と明治以降の近代文書を含む膨大な文書群である。

以下簡単に現段階でわかる範囲の内容について、特殊あるものを若干紹介してみよう。

まず近世の村方文書としては、「五人組改帳」(享保二二年以降)、「御年貢覚帳」(同一四年以降)、「宗門人別帳」(宝暦一〇年以降)、「村入用夫銀帳」(安永二二年以降)、「御用留」(同三年以降)、「明細書上帳」(同六年以降)、「田畑高反別帳」(同七年以降)、「新田検地帳」(同八年)等である。坂井家の経

営文書としては「大福帳」(享保八年以降)、「万買物覚帳」(同二〇年以降)、「利足書出し帳」(同二〇年以降)等がみられる。

明治初年の史料では、中信商社関係が多数存在している。例えば、「廣式分判損金償策」、「商社立替金出金名前帳」、「商社規則書」、「商社基本紀」、「中信商社雑事録」等であり、これまで未解明であった中信商社の研究に役立つ貴重な史料である。

明治期に入ると、当家には傑出した人物坂井量之助(一八五五〜一九〇五)が出現し、多面的な活動を展開するが、その関係史料が多数存在している。代表的なものは自由民権運動に関するものと、戸倉温泉開湯に関するものである。

量之助は県会議員となり、自由民権運動に携り、明治二〇年(一八八七)一月には中江兆民を迎えて、長野町城山館で信濃全国大懇談会を開催した。このとき量之助は「条約改正建白書」を印刷し参会者に配布したことにより、政府の秘密出版条例違反嫌疑にかかり、長野監獄に収監された。このときの関係史料が一括に纏められている。量之助の仕事で一番大きな功績として讃えられているのは戸倉・上山田温泉の開湯事業

である。私財のほとんどを投げうって苦心惨憺の成果として生み出されたものである。その過程を示す関係史料が多数存在しているのである。

このほか、国文学史上注目すべき史料として、「人恋し」灯<sup>ともし</sup>頃を 桜 散る」で有名な俳人加舎白雄(一七三八〜九二)に関する書簡遺墨が多数存在している。これは、当家七代目坂井要右衛門兼甫(俳号鳥奴)が白雄の門人であり、白雄は坂井家に長期逗留し、この間、兼甫の支援により、「おもかげ集」「田毎の春」などを出版したのである。白雄に関する多くの史料は鳥奴やその子可明との往復書簡遺墨であり、貴重なものといえる。

さて、今回の史料調査では、これら膨大な史料群のなかで、近世の冊子文書一二五八点が目録化されたのみであり、その他は今後の課題として残されたのである。

なお、坂井家では、最近「酒蔵コレクション」を開館し、加舎白雄や坂井量之助に関する史料や酒造の全過程を示す道具類や民俗資料などを展示している。二月・一月・二月の冬期は休館しているが、それ以外は毎日公開している。(森 安彦)

## 『依田長安一代記』の刊行

本年度は「史料館叢書7」として当館所蔵の甲斐国山梨郡下井尻村依田家文書から「依田長安一代記」を編集し翻刻刊行する。

依田家文書は依田泰八氏の嗜好により數次にわたって当館に収蔵されたもので、「史料館所蔵史料目録」五集、一三集に目録化されている。下井尻村は現在は山梨市に所屬している。

本書の主人公である依田長安は延宝二年（一六二五）に生れ、宝曆八年（一七五八）に八五歳で没した人物である。

彼が元禄一〇年（一六九七）に家督を相続した時、同家の持高は下井尻村分三三石余であったが、六一年後の没年には五〇〇石余に達し、周辺迄拡大していたと推測される。

宝曆二年（一七五二年）序、巢飲叟鶴鼠（甲府勤番、成方野田市右衛門）作、來椒堂仙鼠増補「裏見寒話」巻之四（萩原頼平「甲斐志料集成」三卷二〇二頁）には「富有」の一人として、彼「依田民部」が記るされている。

文字通り一代で財を築きあげた人物と云えよう。

長安は「依田民部源長安一代記」を作成している。内容は元禄一〇年（一六九七）から宝曆五年（一七五五）迄であるが、没後に若干加筆された可能性もある。

推測の域を出ないが、寛保三年（一七四三）に最初作成され、後年何回か書加えて現在の型になったようである。長安自身の自伝的構成でもあり、長安はこの一代記と共に若干の史料を後世に遺す考えがあつたようである。また文中に「別帳二有り」との記事があり、該当する史料が現存している場合もあるので、これらを中心にして本書「依田長安一代記」を編集した。

収録史料は一代記と共に長安が重視した「依田家訓身持鑑」「他我徒然物語」などの家訓、及び「諸道具目録」「譲り状」「遺言状」、それに享保一四年（一七二四）隠居に際しての書類、資産としての金子改を収めた。つぎに長安の信仰を示すものとして伊勢講に基づく参宮、西国巡礼の道

中日記と、彼が建立したが結局取消に至った浄秀庵関係を収録する。

譲り状などからすると、隠居後も経済活動を続け、屢々財産を分与しても、再び手元に資産が集まつて又譲り状を作成するが、一方では一旦作成した譲り状を反故にしている場合もある。私などからみると長安のような人物には金の方から寄つてくるとはひがみかもしれないが。

つぎに下井尻村は享保九年（一七二四）に柳沢氏から天領に支配が替り、石和代官所に属する。長安は石和代官小宮山奎之進昌世、及びその手代と交際があり、彼等の書状には現地の有力者との関係、及び代官小宮山の進退問題にふれるものがあり興味深い。

さらに「万覚帳」の他に参考史料として、息子の依田矩長の「日記」「歳暮帳」を収め、最後に長安の葬儀関係史料を収載した。これら参考史料には民俗史料や、下女の内に乳母がいる事、親分小分の関係を推測させるものなどがある。

土地集積、小作、金融等の関係諸帳簿は解説でふれるに留めた。長安は生活の内を着実に経営を拡大すると共に、書物を購入して教養

をつけ、家屋、諸道具を整備している。家訓には蔵書の軍記物などの影響もみられるが、方言、宛字をそのまま記し、決して形式的なもののみではない。蔵書には「農業全書」がみられるが、これは依田家に現蔵されている。

人名、地名の索引を付したので、彼の生活を具体化に把握する事が可能となった。

さて長安の筆蹟をみると、晩年に眼を病み字の乱れがあり、彼程の幸運の人物でも女婿との関係や妻に先だたれるなど、老年を感じさせるものがあるが、筆蹟は翻刻の性質上、当館で文書を閲覧願わなければならぬ。一方眼を病んでいる時期に正常な筆蹟のものもある。誰の筆かは確認していない。

それにつけても、依田泰八氏、一家がお元気でこの出版を待っていて下さる事は、文書の整理以来何かとお世話になつて私には嬉しい事である。

（藤村）

東京大学出版会三月末発行  
A5判 本文 二九九頁  
上製本 解説 人名・地名  
索引付  
定価 八千円

# 「全史料協」に期待すること

## ——第10回全国大会に参加して——

安藤 正人

全国歴史資料保存利用機関連絡協

議会（今大会において従来の名称に「全史協」を冠することが決まり、略称も「全史料協」となった）は、昨年設立10周年を迎え、その記念すべき第10回全国大会を10月25日・26日の両日、埼玉県立文書館において開催した。本協議会は現在、機関会員三九機関、個人会員六六名で、今回の大会参加者も一八名を数え、順調に活動している。設立以来この会の発展に寄与された多くの方々に、あらためて敬意を表したいと思う。

さて今回の大会では、初日に埼玉県立文書館の館内見学をしたあと、「文書館の管理運営」「文書館と情報公開」の二つの分科会が持たれ、二日目には、地域別懇談会に続いて安藤正人が「海外文書館事情——イギリスを中心に」と題する報告を行なった。以上の会議の内容を紹介すべきだが、それはいずれ発行される全史料協「会報」に譲り、ここでは「全史料協」が今後果たすべき役割について、一、二の希望を記したい。

第一に、史料館・文書館における

史料保存提供業務についての、理論的・実務的な研究交流の促進。まず必要なのはこの点であろう。史料館・文書館システムを法的にも社会的にも定着させようとするならば、史料館・文書館の業務が他の機関や組織をもつてしては代えられない独自の専門的なものであること、従ってそこには高度な知識と技能を持つた専門職＝アーキビストが必要なこととを役人・研究者・国民一般に対してわかりやすく示さねばならないと思う。そのためには、まず現に史料館・文書館で働く我々自身が自らの仕事の意義と目的を自覚し、プロフェッショナル・アーキビストとしての高い知識と技能を獲得するために努力しなければならぬのもちろんである。昨年九月、西ドイツのボンで開催された第10回文書館・史料館国際会議の報告のひとつに、「継続研修におけるアーキビスト協会の役割」というのがあったが（本誌安澤氏稿参照）、そこでは、国際的に重

要性を持った最初の文書館学ハンドブックがオランダ・アーキビスト協会の活動の成果として一八九七年に出版されたことや、今日のアーキビストが情報科学の急速な進歩や社会的任務の増大に直面して不断の継続的研修を要請されている事実があげられ、専門職集団としてのアーキビスト協会がアーキビストの知識・技能向上に果たすべき大きな役割は昔も今も一貫して変わらないことが指摘されている。私は「全史料協」が日本における唯一の史料保存提供専門職団体として、これまで以上に日常的な研究交流の機会拡大に努力し、

（その一端は既に「関東部会」の活動にあらわれているが）、それを基盤にして研究誌やハンドブックなどの発行を実現するよう願うものである。特に研究誌の発行は、会員相互の情報交換や専門知識の普及向上に役立つだけでなく、「全史料協」に参加していない全国の多くの史料保存提供業務従事者にとつて希望のものであろうし、研究者や一般国民にアーキビストの仕事を理解してもらう絶対好の手段でもある。

第二は、文書館・史料館システムの法的整備、いわゆる「文書館法」制定の問題である。これは「全史料

協」が特に力を入れてきたことであるから私などがあらためて指摘するまでもないが、「文書館法」の柱の一つとなるべきアーキビストの地位と資格・具体的職務・養成課程などについて言えば、その基礎的研究はまだ本格的に成されていないと思う。先にあげた国際会議での報告によれば、オランダでは一九一八年の最初の「文書館法」と一九六二年の現行法ともにオランダ・アーキビスト協会が作成した法案がベースとなった由であり、特に一九一八年法で協会の勧奨に基づきアーキビストの地位・資格基準が明確化されたことにより、正式なアーキビスト養成学校が発足することになったということである。こうした先進国の事例をみても、専門職＝当事者集団である「全史料協」は、アーキビスト養成課程や「文書館法」の案を率先して提起する義務があると思う。

当面重要と考えられる点を述べたが、右のような活動を進めるにあたっては、組織の拡充と、「文書館国際評議会ICA」を中心とした国際交流の推進が不可欠であろう。そのためには事務局体制の改善・強化も必要となろう。及ばずながら協力は惜しまないつもりである。

# 第一〇回史料館国際会議ボン一九八四と

## 研修セミナー

安澤 秀一

第10回史料館・文書館国際会議が1984年9月西ドイツ・ボンにおいて93カ国954人を集めて開催された。ロンドン1980が68カ国・777人であったのにくらべ、かなりの増加といえる。日本からは、国立公文書館2人、国立史料館2人、東京都公文書館2人が参加した。前回にくらべ3倍である。

「対応II：管理と人的資源」は東ドイツの主報告と、副報告「継続研修におけるアーキヴィスト協会の役割」オランダ、「図書館学校・史料館字校の協力」イギリス、「マスコミ関係アーキヴィストの研修」西ドイツ、「記録担当職員の研修」フィンランドであった。

また基調論題と別に、全体会議における特別論題として「複写による史料交換のための国際協力事業」が取上られ、主報告ハンガリー、副報告ジンバブエ、ポーランド、イギリス、オランダ、アメリカ、西ドイツによる報告があった。

会議の基調論題は「史料館に求められているもの」増大する責任と限られた資源であった。主報告「求められているもの」スイスを補う副報告は「史料館の増大する社会的役割」ソ連、「開発途上国における史料保存の主導性」コンゴ、「連邦政体と史料保存」ブラジル、「拡大する史料館機能」口承史料の取扱」シンガポール、「史料保存政策と管理における非中央化の圧力」スペインであった。

求められているものに対する「対応I：管理と技術資源」はカナダの主報告に加えて、副報告「史料館への企業管理技術の応用」オーストラ

リア、「史料検索の自動化」アメリカ、「保存計画の管理」インド、「地方史料館の管理」ユーゴスラヴィヤが行われた。

史史料館委員会、文学・芸術史料館委員会や、ICA地域支部会議である。加えてアウグスブルグ城での全体歓迎会（連邦内務省長官・州政府文化庁長官共催）、連邦議会其他の歓迎懇親会（小人数）、連邦史料館（コブレンツ）見学ツアー（ライン川経由）、また会場ベートゥェンホールでのハンガリー交響楽団によるコンサートで楽しませてくれた。

今回の会議で目立ったのは中国の積極さであった。参加者は7人でその多いとはいえないが、全体会議における全ての討論の機会を逃さず必ず発言して、自国の史料館活動の状況を知らせることにとめていた。なかでもアーキヴィスト養成について正規学生3000人と述べた時の満場のざわめきは忘れられない印象を与えた。なぜならこれまでの、世界中で現職6〜7000人、養成中3000人という数字を一挙に奮替えねばならないからである。それにして中国の近代化と国際交流に対する並々ならぬ傾注の程を確かめさせられたものである。成果は、最終日において中国が理事国に選出された時の満場の拍手に表われた。

さて本会議の後か前に、アーキヴィスト研修セミナーが開かれるの

が例のようである。今回は本会議開催前の9月10日から14日までの5日間に、次の様な講師とテーマで行われた。なお準備などの世話をしてくれたのは、連邦史料館のK・オルデンハーゲ博士、ドイツ国際振興財団のL・ヒュッテマン氏、A・レイナルツ嬢であった。

F・エヴァンス博士（USA国立史料館部長・前ユネスコ特別企画官）

「史料館当局者は如何に企画し実行するか」—管理概念、基本的法令・法規、史料館の位置付け、記録管理の諸問題、史料サーヴィスの国際機構、企画立案、財務管理、変化する管理—

E・G・フランツ博士（西ドイツ・ヘッセン州史料館教授）

「史料館職員計画と研修」—史料館職員（専門職・専門職補・技術職）の定義、職員採用募集、研修の必要性、研修施設、職場研修と継続研修、情報関連専門職との協同、M・ローパー氏（イギリスPRO部長）

「修復および複写工作室の企画と実施」—準備さるべき用具器具（必要物の査定）、企画／技術的配慮（場所とサーヴィス、職員、費用、協力）、管理／職員構造（人員、研修、予算、事務手続、技術向上）

E・ケテラール博士(オランダ・フ  
ロニン・ハン州史料館副館長)

「史料館企画・運営における現代情  
報技術と統計学の利用」―管理業  
務の成果と企画・管理行動とを結  
ぶ基礎手段の概観と評価・史料館  
企画と管理における応用統計学的  
管理と情報過程(含 財務管理・  
成果測定等)―

毎日9時から12時までを、右の4  
テーマについての講義と討論で過し、  
昼食後は各種施設の見学、そして夕  
食も全員で共にした。見学先はボン  
市史料館、聖オウガスチン市所在連  
邦史料館・記録センター、ケルン市  
史料館、ドイツ連邦議会情報/文献  
情報検索処理施設であった。

最終日は総括討論と勸奨の作成に  
充てられた。講師も含めた全参加者  
が一致して採択した決議を紹介して  
おこう。

1 史料館||文書館を実質的に向上  
させる貴重な経験を此のセミナー  
が証明しているので、アーキヴィ  
ストに対する継続的な教育の場と  
して、後援団体が国際的にも地域  
的にも同様のセミナーを組織し支  
持することを願うものである。

2 史料館||文書館発展に役立つ関

連情報や財政的技術的援助と、そ  
うした援助を得るための手続きに  
ついての知識の欠如が、史料館||  
文書館企画を効果的ならしめる際  
の主要な障害となつていていること  
を考慮して、そうした情報をもつと  
広範に知らしめるような適切な手  
段がとられるべきである。

3 適切なアーキヴィスト資格認定  
の重要性を考慮すると、史料館||  
文書館学の学位やディプロマおよ  
び資格に関する標準化と国際的容  
認の必要性について、特別な配慮  
がなされるべきである。

4 史料館||文書館における保存と  
複製作成という分野での実技者配  
置の深刻な不足を考慮して、此の  
問題を克服する方法と手段の促進  
に、優先性が与えられるべきである。

5 史料館||文書館に関する測定お  
よび評価のための基礎的方法・規  
範・基準および指導要領について、  
史料館||文書館システムとサー  
ヴィスにおける管理の重要な役割  
を気付けさせるため、此の分野での  
一層の発展と遂行が望ましい。

セミナー参加者は本研修セミナーを  
組織したICVAに対し、また財政援助  
をしてくれたユネスコ、ドイツ国際  
振興財団および西ドイツ政府に対し、

その御好意に感謝するものである。  
また此の地で開催することのできた  
のは、第10回史料館国際会議(ICVA)の  
オーガナイザーのお蔭であることに、  
特に謝意を表したい。

〈研修セミナー参加者全員署名〉  
セミナーの参加者は開発途上国の  
アーキヴィスト34人であった。ちな  
みに国名だけを示せば、タンザニア、  
イラン、トリニダド、ガーナ、ブル  
ネイ、エチオピア、モロッコ、ハイ  
チ、セネガル、コスタリカ、マラウ  
イ、ナイジェリア、ペリーゼ、ブラ  
ジル、アンティグア、タンザニア、  
ボツアナ、ケニア、バルバドス、ジ  
ンバブエ、トーゴ、ザンビア、クツ  
ク諸島、メキシコ、ネパール、ヴァ  
ヌアツ、フィジー、シエラレオネ、  
スワジランド、スリランカ、リベリ  
ア、タイ、中国、日本である。

ユネスコによる旅費・滞在費支給  
という恩恵に浴してセミナー出席の  
ため早目にドイツ入りした私を、国  
際会議そのものの責任者でもあった  
オルデンハーゲ博士がフランクフル  
ト国際空港に出迎えてくれたのは、  
まことに恐縮の至りであった。しか  
しセミナー出席の人々から、日本の  
ような金持の国の人間がユネスコ援  
助で参加してきたのは何故かと聞か

れた時には、どうにも返答に窮した  
ものである。私の肩書が国立施設の  
教授・博士とあっては、その人々の  
疑問は当然であろう。私への招請が  
日本の史料館||文書館システムの弱  
体さを知るユネスコPGI・RAMPI関  
係者の御好意であれば尚のこと、此  
の疑問は痛切であった。

とはいえブラック・アフリカ、太  
平洋地域、カリブ海、中南米諸国、  
そして中国のアーキヴィストと1週  
間、殆どの時間を共に過し、また本  
会議においても仕事仲間という共感  
で結ばれた経験は実に有難く、見学  
も、期限のきた現用記録の全てを半  
現用記録として移管し、その中から  
永久保存に価すると評価した非現用  
記録||史料を史料館に管理換えする  
まで、30年間の熟成期間において絶  
えざる選択を行う施設としての「記  
録センター」(中間取扱い施設の広  
大な敷地と建物や、12世紀から現代  
までの史料を一堂に保存し、十全の  
物理的保存処置の設備を整えたケル  
ン市史料館、そしてコブレンツに建  
設中の連邦史料館の考え抜かれた設  
計など、史料保存利用施設の実態に  
触れたことは私にとって感動の連続  
であったことを述べておきたい。

(昭和59年12月24日)

中国におけるアーキヴィスト養成の現状

— 史料館国際会議(CAボン) 1984中国の報告 —

新中国の創建以来、過去35年間に、史料館サーヴィスの発展と史料館勤務者に対する急速な需要の結果として、中国におけるアーキヴィストの教育と研修はたいへん発展した。現在の中国におけるアーキヴィストの教育・研修制度は基本的に確立しつつあり、それは大学教育、職場内養成、定時制教育、通信教育からなっている。

大学教育の場合、数次の発展段階があった。1952年に1年制アーキヴィスト研修過程が中国人民大学に設置された。此の課程は1953年に2年制専門学校となった。1955年には4年制大学となった。1966年までに此の学部卒業生は1769人に達した。「文化大革命」の混乱のせいで、他の大学や専門学校と同じく募集を停止した。

1979年初頭以来、中国人民大  
学史料館学部の再開に加えて、かつてない発展が史料館学教育・研修に見られた。史料館学部が28の大学・専門学校に設置され、3000人の学生が学んでいる。その中には大学

院150人が含まれており、3年ないし4年後には毎年750人という数になるであろう。また定時制課程が14の大学・専門学校におかれ、1500人が学び、その半数が毎年卒業する。

主要科目のみの短期研修課程は全国的規模で行われている。1981/1982年の統計によれば、21万人がこうした研修を受けている。例えば西安省史料館は1979—1983年に7回の短期研修課程を実施した。期間は毎回4カ月である。現在1400人以上の史料館勤務者がこうした研修を受けている。省史料館は3年以内に省内の史料館勤務者の研修を終えるよう計画している。

上記の方法は全国的に史料館の水準を向上させる重要な役割を演じている。しかし中国におけるアーキヴィスト専門職教育・研修は最近の5ないし6年の間に行われたにすぎないし、より一層の発展と強化のためにもっと努めねばならない。われわれは他の国々から此の分野における成熟した経験を学びたいし、友人と仕事仲間たちからの、どのような提案も論評も歓迎するものである。

## 昭和五九年度新収史料紹介

⑤はマイクロフィルムによる収集を示す。

### 受託史料

#### 上野国 板倉家文書

安中板倉家は板倉周防守重宗の二男重形より起こり、八代目の勝時に薩藩置県を迎える。三代目の勝清は老中となって安中城を拝領し、石高は三万石に至っている。

板倉家の現御当主弘氏（相模原市上鶴間七二—一五）は昭和五九年八月お手許にご所蔵の史料を当館に寄託された。史料は家系図、官位叙任の位記・宣旨、弓道・馬術等の兵法秘書、陶宮術・護身法関係史料、寛延二〜嘉永七年の間の加増・村替に伴なう「郷村高帳」（六冊）、そして明治期の家政史料として、家憲草案、第十五国立銀行設立関係史料、太政官の「廻章留」、宮内大臣への願書、その他書状、絵画、詠草など総て一九五点である。なおこの他に系図・安中領内絵図など五点があり、これはマイクロフィルムで収録した。

#### ⑥越中国 島村折橋家文書

##### 射水郡

折橋家は「金子文書折橋文書調査報告書」（富山県教育委員会、昭和四十九年三月発行）の解説によると、佐々木五郎衛門心願の末裔で、もとは信州水内郡折橋村に居住、天正年間に越中射水郡鳴村に移住して折橋を名乗る郷士となり、寛永一二年に十村肝煎に任ぜられた。慶安元年に十村役に任命された際には折しも施行された改作法の実施に貢献、明暦三年には前田利常から、いわゆる「青葉の御印」をうけ、以来代々扶持人・十村・年寄役等として民政にあたった由である。

本文書は、御当主が東京の御自宅に保管されていたものを撮影収集させていただいたものであるが、収録点数は前掲「調査報告書」にある一二〇点の内の約半分である（一部「調査報告書」未掲載の史料を含む）。内容は十村役の機能に応じて多様だが、特色はやはり藩政初期の税制、改作法関係史料が豊富なことで、寛永一五年の「小成物算用場召出状」、「明暦元年留帳写」、明暦三年の

「勤農につき御印状」、明暦二年の「馬口労役等免許状」などがある。(現蔵者＝東京都世田谷区豪徳寺二ノ一三ノ六 折橋禮一氏。収録点数五四九点、一六リール、九九二七コマ)

### ⑤陸奥国支倉家文書

伊達家中 支倉家文書  
仙台伊達家の家臣支倉家に伝わる史料三五点を支倉房子氏の御好意によつてマイクロフィルムに収録させて頂いた。史料は支倉家の家譜などの他、知行所宮城郡国分六丁目村の「御物成極小割帳」二〇冊(文化一二〇嘉永六年)がある(収録コマ数四一四コマ。現蔵者＝東京都品川区東大井四一七一一四、支倉逸人氏)。

### ⑥越後国榊原家文書

上越市立高田図書館所蔵の榊原家文書のうち藩日記をマイクロフィルムに収録した。今年度は昭和五七・五八年度収集分のとをうけて「高田日記・高田御用留」を寛政三年から慶応二年まで一三三冊、「江戸日記・御留守中御用留」を文化元年から文政元年まで二四冊、計フィルムコマ数一六八七二コマを収録した。長期に亘る撮影に御協力下さっている同図書館に深く御礼申し上げます。

### ⑦阿波国 板野郡 齋田村山西家文書

当館所蔵の山西家文書(祭魚洞旧蔵水産史料)のうち「史料館所蔵史料目録第8集(所収)」の補完作業として、現在も原蔵家方に保存されている同家文書を昭和五七年度から継続して複写に当り、今年度において完了した(史料館報38・40号参照)。阿波国板野郡撫養塩田を背景に幕末―明治期に塩問屋並びに廻船業者として、全国的規模の交易を展開した山西家の経営史料のうち、今年度は「肥物万売帳」を初めとする明治九年以降大正期に亘る帳簿一七冊である。予算上の制約から三年度に亘る複写に当つて、煩雑を厭わず快くご許可下さつた所蔵者山西孝枝氏をはじめ、撮影の場を提供下さり、全面的なご協力を賜つた鳴門市史編纂事務局の方々、とりわけご懇切なご助力を頂いた同局長橋本啓司氏・同局中野正司氏、また徳島県立城東高校の泉康弘氏にも格別なご協力を頂いた。末筆ながら記して深謝の意を表するものである。(現蔵者＝山西孝枝氏、鳴門市撫養町齋田大堤四の一〇、収録点数、一三リール、七七四四コマ)。

### ⑧讃岐国 阿野郡北渡辺家文書

青海村 渡辺家文書  
本文書は旧北条郡松山郷青海村の大政所渡辺家の旧蔵文書で、昭和四六年瀬戸内海歴史民俗資料館に譲渡されたものである。渡辺家は瀬戸内海に面した青海村で国産の砂糖と塩業に関係し、江戸時代の前半には政所として活躍し、天明八年(二月五郎左衛門義彬が阿野北郡大政所に就役してからは幕末まで大政所を勤めた家である)。

本文書は大政所(大庄屋)としての史料と、砂糖関係の記録が比較的良好揃っているが、今回は大庄屋御用日記(文化一五年(文久四年)四三冊を収録した。この御用日記は大庄屋の職務内容が詳細に記録され、なかでも大検見の際の下達・上申の手続・経緯などが克明に記され、大庄屋の職掌の一形態を明らかにすることが出来る史料である)。

今回の史料撮影に際し瀬戸内海歴史民俗資料館の皆さまをはじめ徳山久夫氏、館長小野賢治氏に大変なご高配を賜わり無事終了しましたことを記し謝意を表する次第です。(現蔵者＝高松市亀水町 瀬戸内海歴史民俗資料館、総点数四三冊、二二リール、一〇八七八コマ)

### ⑨肥後国 本戸馬場村木山家文書

天草郡 本戸馬場村木山家文書  
本文書は天草郡本戸組の大庄屋文書で、一九八一年度に次ぐ第二次収集として実施したものである。木山家については、一九八一年度新収集紹介(本誌36号)を見られたい。今回撮影収集した史料の概要は、

- (1)「御用触留帳」六冊(文久四(明治三年)。第一次収集分六十冊の残り)。
- (2)「萬覚」五三冊(宝暦一四(文久四年)。本戸組各村よりの願書類と代官所宛の大庄屋願書類などの控で、天草幕領行政の貴重資料である。ほかに大庄屋「日記」四冊も撮影した)。
- (3)その他の冊子文書。世襲大庄屋としての役儀に由来して伝来した冊子文書約一五〇冊である。内容はさまざまだが、「大庄屋勤方書付」などの役職関係(会所定式并年中諸入用勘定帳)などの郡会所関係、それに「百姓相続方仕方」に関わる貴重な史料も多数含まれている。
- (4)一紙文書。一紙文書は膨大な量が残存しているため、目録記載順に取りあえず約百点を撮影し、残りは次回を期すことにした。(現蔵者＝本渡市浜崎町一の一五 木山惟彦氏。収録点数三一四点、一四リール、七八一六コマ)

# 受贈図書

## 昭和五十八年度(三)

常陽の村落史料目録 No.21 (立正大学古  
文書研究会)

日本大文学術雑誌総合目録 人文・社会  
科学 和文編

国士館大学増加図書目録 昭和57年版・  
同索引

明治大学刑事博物館目録 第51号

東京女子大学逐次刊行物所蔵目録

比較文化研究所蔵書目録 VII (同右)

新収図書目録 一九八一年度版 (共立女  
子大学図書館)

盛田家文書目録 上巻 (助鈴漢学術財団)

禅宗地方史調査会年報 第一〜三集 (禅  
宗地方史調査会)

図録近世画人の描いた芭蕉肖像画集 (江  
東区教育委員会芭蕉記念館)

東京天文台所蔵天文暦学関係と漢書目録  
(内田正更)

東京大学史学科目録 1〜10 (東京大学  
百年史編集室)

神奈川県古文書資料所在目録 第6集  
(神奈川県立文化資料館)

神奈川県関係新聞記事索引 第22集 (同  
右)

神奈川県立図書館蔵書目録 和書の部  
第13

藤沢市史資料所在目録稿 第16集 (藤沢  
市文書館)

神奈川大学図書館蔵書目録 和書 昭和  
57年・洋書 (同)

金子文書折橋文書調査報告書 (楠瀬 勝)

東福寺野文書史料目録 (同右)

金沢大学図書目録 第19巻

白山本宮加賀一ノ宮白山比咩神社古文書  
目録 (金沢大学日本海文化研究室)

能登羽咋郡二所宮村政氏家文書目録 (石  
川県立図書館)

能登輪島上梶家文書目録 (同右)

白山麓島村山口家杉原家文書目録 (同右)

白山麓島村諸家文書目録 (同右)

平島家文書目録 (同右)

加賀鶴来枝権兵衛家文書目録 (同右)

能登羽咋桜井平秋家文書目録 (同右)

能登門前伊藤家文書目録 (同右)

能登志賀平家文書目録 (同右)

能登珠洲上戸村真頼家文書目録 (同右)

能登珠洲友貞家文書目録 (同右)

大館コレクション目録 書籍編 (石川県  
立郷土資料館)

吉田屋文書調査報告書 (同右)

能登穴水天領文書目録 (穴水町教育委員  
会)

大野市史料所在目録 第四輯  
山梨県立図書館増加図書目録 第三巻  
蔵書目録 No.4 (富士吉田市立図書館)

岐阜県所在史料目録 第11・12集 (岐阜県  
歴史資料館)

岐阜県史料調査報告書 第4号 (同右)

岐阜県行政文書目録 大正・昭和 (30年以  
前) 編 (同右)

音声資料 (放送録音テープ) 目録 (同右)

岐阜県立図書館郷土資料目録 第13集

各務原市資料調査報告書 第一・二号 (各  
務原市教育委員会)

高木家文書目録 巻五 (名古屋大学附属  
図書館)

名城大学蔵書目録 第十二巻

愛知図書館蔵書目録 第4巻

堀田文庫蔵書目録 (名古屋市蓬左文庫)

名古屋博物館蔵書目録 六

静岡県立中央図書館蔵書目録 第2巻

滋賀大学経済学部附属史料館所蔵史料目  
録 第二十八〜三十集

白楊在文庫目録 (立命館大学図書館)

大蔵会展観目録索引 (仏教大学仏教文化  
研究所)

花園大学図書館増加図書目録 一九八二

花園大学図書館逐次刊行物目録 一九八  
三

収集資料案内 No.43・57・58 (京都府立総  
合資料館)

大阪経済大学社会史総合目録

大阪経済大学経済団体史総合目録  
大阪府立大学雑誌目録一第7版一 (欧文  
篇)

大阪市立中央図書館蔵書目録 第15巻

大阪城天守閣所蔵南木コレクション総目  
録 一

守口文庫蔵書目録 図書の一部 古文書の  
部 (予備版)

相生市史編纂資料目録集 第八号

郷土関係資料目録 第11集 (明石工業高  
等専門学校図書館)

姫路市史編纂資料目録集 VII〜15

加古川市史編纂資料目録集 4

東大寺文書目録 第五巻 (奈良国立文化  
財研究所)

奈良教育大学増加図書目録 10

明治初年布告・布達類目録 (奈良市史編纂  
室)

奈良市史資料所在目録 第4集 (同右)

和歌山県古文書目録 1 (和歌山県教育  
委員会)

蔵書目録 第13・14巻 (鳥取大学附属図書  
館)

岡山県総合文化センター増加図書目録  
第11巻

旧矢掛脇本陣高草家歴史資料目録 1  
(岡山県教育委員会)

館蔵品目録 (I)・(II) (岡山県立博物  
館)

広島県内公共図書館郷土資料目録 第

24・25号 (広島県立図書館)

広島県行政資料目録 昭和57年版(同右)

広島市公文書館所蔵資料目録 第4集

広島市行政資料目録 図書編追録2・資料編追録2 (広島市職員研修所行政資料室)

山口県文書館地方調査員調査報告 10

香川大学増加図書目録 昭和56年度版

歴史収蔵資料目録 八(瀬戸内海歴史民俗資料館)

瀬戸内の海軍史料調査報告 第一〜五集(同右)

福岡市民図書館筑紫豊氏寄贈資料目録 No1(福岡県立図書館)

福岡県郷土資料総合目録 3・4(同右)

福岡県歴史資料調査報告書 第二〜十集(同右)

佐賀県立図書館所蔵佐賀県明治行政資料目録・江藤家資料目録

有田町歴史民俗資料館収蔵文書目録 第二集

熊本県立図書館郷土資料増加目録 昭和56年4月〜昭和57年3月

熊本県郷土資料総合目録 第3分冊(同右)

別府大学文学部史学科所蔵文書編年目録(第六集)・(第九集)

秋田県教育史基本資料目録 第五集(秋田県教育委員会)

増加図書目録 昭和48・49・53年度(福島)

県立図書館

史料目録 13・14(茨城県立歴史館)

常呂町のアイヌ語地名(オホーツク文化資料館)

神の語り神互いに話しあう(同右)

帯広叢書 第二十五巻(帯広市教育委員会)

青森県立図書館郷土双書 第二十二集

北上市史 第九巻

(岩手県) 大迫町史 民俗資料編

仙台市文化財調査報告書 第49・55・57集(仙台市教育委員会)

大館市史 第三巻 上

秋田県教育史 第四巻(秋田県教育委員会)

山形市史資料 第66号

村山市史編集資料 第十三号

東根市史編集資料 第15号

天童市史編集資料 第34号

山形県教育史資料 統計篇 第四巻(山形県教育委員会)

須賀川の歴史と文化財(須賀川市教育委員会)

(福島県) 梁川町史 12

(福島県) 鏡石町史

会津田子倉の歴史 下巻(渡部政吉)

(福島県) 岩代町史 3

会津藩家世実紀 第十巻(家世実紀刊本編纂委員会)

(茨城県) 筑波町史 史料集 第七篇

史料調査報告 第三十一・三十二集(足利藩研究会)

(群馬県) 新田町誌基礎資料 第六号

曠野の夕陽(埼玉県)

川越市史 第三巻

千葉市史 史料編 4

(千葉県) 袖ヶ浦町史 史料編 1

習志野市史資料集 二〜六

佐倉市史料 第二集

我孫子の史跡を訪ねる(我孫子市教育委員会)

中央区年表 江戸時代篇 上(中央区京橋図書館)

豊島区史 通史編 二

調布のあゆみ(調布市郷土史料保存会)

新宿区史 区成立三〇周年記念

(東京都) 羽村町史史料集 第十一集

東京都議会史 第七巻 下

新宿区町名誌(新宿区教育委員会)

ガイドブック新宿区の文化財(1)〜(9)(同右)

地図で見る新宿区の移り変わり 四谷編・淀橋大久保編(同右)

新宿区地図集(同右)

西谷戸遺跡・西谷戸横穴墓群発掘調査概報(世田谷区教育委員会)

多聞山遺跡調査報告(同右)

調布市の教育(調布市教育委員会)

調布市教育史(同右)

福井県史 資料編 4

長野県史 近世史料編 第九巻・近代史料編 第三巻(一)

真田家文書 下巻(長野市)

岐阜県議会史 第一〜五巻

ふるさと富士川 第三集(静岡県富士川町教育委員会)

新修稲次市史 資料編七(図版共)

西尾の文化財散歩(西尾市教育委員会)

松阪市史 第十六巻

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第3集(宇治市教育委員会)

大阪市史史料 第十一輯

兵庫県史 史料編 中世一

龍野市史 第四巻

(兵庫県) 出石町史 第一巻

岡山県史 第二十六巻

防長寺社由来 第四・五巻(山口県文書館)

広島新史 行政編

伊予吉田旧記 第二輯(伊予吉田旧記刊行会)

佐賀県史料集成 古文書編 第二十四巻(佐賀県立図書館)

(大分県) 九重町文化財調査報告第十二輯(九重町教育委員会)

鹿児島県史料 旧記雑録 後編四・青彬

公史料 第四巻

国立国語研究所資料集 10-7

小田原図書館五十年史

蓬左文庫図録

瀧川家伝記(瀧川一美)  
資料館ガイドブック Ⅰ(埼玉県立歴史資料館)

資料館)

最後の職人展(千葉市立郷土博物館)

県内で出版された埼玉資料の展示会(埼玉県立川越図書館)

市町村刊行資料展 県西地区(同右)

徳島の女性先覚者展図録(徳島県博物館)

阿波蜂須賀侯御用絵師展図録(同右)

荒川の漁具(埼玉県立博物館)

田中正造・河野広中・植木枝盛特別展示

目録(憲政記念館)

日本のやきもの 皿と鉢100(サントリー美術館)

鹿角市史資料編 第十集

昭和58年度秋田城跡発掘調査概報(秋田市教育委員会)

山形市史資料 第67号

東根市史編集資料 第16号

南陽市史編集資料 第11号

白石市史 3の(2)

福島市資料叢書 第39~41輯

真岡市史 第一・二巻

栃木県史 通史編3・5・8

栃木県史編さんの記録

新編埼玉県史 資料編3・25

吉備の国宝・重要文化財(岡山県立博物館)

日光参詣の道(栃木県立博物館)

江戸学事典(弘文堂)

熱田神宮文書 千秋家文書(熱田神宮宮庁)

江戸幕府撰国絵図の研究(古今書院)

創立十周年記念論集(大阪大学人間科学部)

近代日本の都市型住宅の変遷(都市住宅研究所)

続海軍史料叢書 第八巻(日本海軍史学会)

サンワのあゆみ(三和銀行)

## 昭和五十九年度(一)

岩槻市史 近現代史料編Ⅰ・金石史料編Ⅰ・Ⅱ・民俗史料編

所沢市史 社寺

東松山市史 資料編 第4巻

春日部市史 別冊

東松山市史編さん調査報告 第25集

(埼玉県) 大井町史料 第28~32集

浦和市文化財調査報告書 第28集(浦和市教育委員会)

成田市史 近世編 史料集三・現代編史料集

船橋市史 史料編一

太田区史 資料編 加藤家文書Ⅰ・北川家文書Ⅰ

武蔵府中叢書 15(府中市郷土館)

府中市郷土資料集 7(同右)

世田谷区旧村古地名集(世田谷区教育委員会)

世田谷の地名 上巻(同右)

世田谷区石造遺物調査報告書Ⅰ・Ⅱ(同右)

世田谷区社寺史料 第三集(同右)

世田谷区寺院台帳(同右)

伊勢道中記史料(同右)

等々力 世田谷区民俗調査第4次報告

(同右)

世田谷の民家 第3輯(同右)

世田谷区指定有形文化財阿弥陀如来坐像

修理報告書(同右)

下野毛遺跡調査報告書(同右)

廻沢北遺跡Ⅰ(同右)

下神明遺跡Ⅰ(同右)

須原家文書 3(江戸川区教育委員会)

江戸川区文化財調査報告書Ⅰ(同右)

郷土資料館資料シリーズ 第23号(八王子市郷土資料館)

国分寺市史料集(Ⅳ)

日野市史 史料集 考古資料編

写された港区 四(港区立みなと図書館)

藤沢山日鑑 第二巻(藤沢市文書館)

新潟県史 資料編5・10・12・18・23

糸魚川市史 6

見附市史 年表・索引

石川県史 現代篇(5)

大野市史 藩政史料編二(第五巻)

(岐阜県) 関ヶ原町史 史料編一

(岐阜県) 岐南町史 通史編

(岐阜県) 美並村史 通史編 下巻

(岐阜県) 高根村史

(静岡県) 細江町史 資料編四

磐田市誌シリーズ 第7冊

(静岡県) 新居町史 第七・九巻

沼津資料集成 第十一集(沼津市立駿河図書館)

新修沼津市史 資料編六

刈谷町庄屋留帳 第十二集(刈谷市教育委員会)

刈谷市文化財図録(同右)

見聞疑案(尾鷲市立中央公民館郷土室)

草津市史 第二巻

- 史料京都の歴史 第5巻(京都市)  
八尾市史(近代)本文編  
藤井寺市史 第四巻・第七巻  
藤井寺市文化財 第五号  
東大阪市史料 第三集(5)  
赤穂市史 第四巻  
広島県史 近世 2  
伊予吉田旧記 第三輯(伊予吉田旧記刊行会)
- 福岡市史 昭和編資料集 前編・後編  
沖繩県史料 近代 4  
大分県史 古代篇Ⅱ・近代篇Ⅰ  
(宮崎県) 佐土原町文化財調査報告書 第3集(佐土原町教育委員会)  
(宮崎県) 田野町文化財調査報告書 第1集(田野町教育委員会)  
(宮崎県) 山田町文化財調査報告書 第1集(山田町教育委員会)
- 宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報  
IV(宮崎県教育委員会)  
宮崎県文化財調査報告書 第27集(同右)  
面山和尚(小浜市立図書館)  
出羽三山の修験道(戸川安章)  
東北の文化と出羽三山(同右)  
陸奥国官寺極楽寺千百年史(司東真雄)  
東京都製本工業組合七十年記念史  
吉岡弥生年譜・東京女子医科大学の歩み  
新収日本地震史料 第四巻・別巻(東京大学地震研究所)  
建設行政のあゆみ(京都市建設局)
- 石炭研究史料叢書No.5(九州大学石炭研究所資料センター)  
佼成図書館三十年史  
秋田のおいたち(改訂版)(秋田県立博物館)  
動物彫刻 縄文から現代(サントリ美術館)  
アメリカ現代陶芸展(同右)  
American Porcelain: New Expositions in an Ancient Art(同右)  
町のにぎわい(相川郷土博物館)  
岩手の懸仏展解説図録(岩手県立博物館)  
特別展赤穂事件と忠臣蔵(兵庫県立歴史博物館)  
史博物館  
はなびらく縄文文化(栃木県立図書館)  
ひな人形の世界(大田区立郷土博物館)  
特別陳列丹後郷土資料と永浜宇平(京都府立丹後郷土資料館)  
総合研究資料館展示解説(東京大学総合研究資料館)  
研究資料館  
総合調査概報 1(花園大学文学部史学科)  
科  
経済史文献解題 昭和58年版(日本経済史研究所)  
図書寮叢刊 壬生家文書六・夫木和歌抄 一(宮内庁書陵部)  
高野山秘宝大観  
津軽藩の基礎的研究(長谷川成一)  
東北歴史資料館資料集 8・10  
能代市史資料 第14号
- 大館市史編さん調査資料 第十八集  
米沢市史 資料篇3  
荘内史料集 9(鶴岡市)  
(埼玉県) 寄居町史 原始古代中世資料編  
千葉県史料 近世篇  
流山市史 近代資料編 新川村関係文書  
船橋の民家 7(船橋市教育委員会社会教育課)  
小金下野牧捕込遺跡(船橋市遺跡調査会)  
法郷台II 奈良平安時代を中心とした集落址の調査(同右)  
明治大学刑事事博物館資料 第6集(東京都) 羽村町史料集 第十二集  
秦野市史民俗調査報告書 3  
各務原市史 史料編 古代中世・近世I  
沼津市歴史民俗資料館資料集 4  
資料中川蔵人政孝日記 4の3・4(藤室藩史研究会)  
宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第4集(宇治市教育委員会)  
泉佐野市埋蔵文化財調査報告 III(泉佐野市教育委員会)  
泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 IV(同右)  
羽曳野市埋蔵文化財調査報告(羽曳野市教育委員会)  
広島県史 中世(通史II)  
広島新史 資料編III・IV 社会編・経済編  
福岡大学総合研究所資料叢書 第4冊(宮崎県) 新富町文化財調査報告書 第2集(新富町教育委員会)
- 集(新富町教育委員会)  
宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書 I(宮崎市教育委員会)  
奄美史料(14)(鹿児島県立図書館奄美分館)  
昭和58年度読書活動状況調査(同右)  
福井市郷土歴史博物館名品図録  
第80回記念太平洋展(太平洋美術会)  
産業革命期の金融(金融経済研究所)  
諸国叢書(成城大学民俗学研究所)  
日本外交文書 大正14年 第二冊 下巻・海軍軍備制約条約枢密院審査記録(外務省)  
北海道所蔵簿書件名目録 第2部 開拓使公文録―東京出張所原本の部(その14)(北海道総務部行政資料課)  
北海道立図書館蔵書目録 第16分冊  
札幌市中央図書館蔵書目録 第一巻  
北海道立図書館増加図書目録 第18号  
札幌大学図書館増加図書目録 第4巻  
札幌大学図書館所蔵雑誌目録 一九八三年版補遺1  
特殊文庫目録 第2冊(宮城県図書館)  
仙台市民図書館郷土資料目録 14  
山形県史料所在目録 第3集  
山形県関係新聞記事索引 昭和58年版  
(山形県立図書館)  
山形県関係文献目録 追録7(同右)  
歴史資料館収蔵資料目録 第13集(福島県文化センター) (以下次号)

# 彙報

## ○史料の収集

今年度は上野国安中板倉家文書（大名）の寄託を受けたほか、次の四件について、マイクロフィルムによる収集を実施した。越中国射水郡島村折橋家文書（十村俊）・陸奥国伊達家中支倉家文書（藩士・阿波国板野郡斎田村山西家文書（塩大問屋兼帯船持）・肥後国天草郡本戸馬場村木山家文書（大庄屋）。このほか特別研究「近世史料の古文書学的研究」の一環として、昨年度に引き続き、新潟県上越市立高田図書館所蔵榊原家文書（大名）・香川県高松市瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵讃岐国阿野郡北青海村渡辺家文書（大政所）のマイクロフィルムによる収集を実施した。いずれも概要は本号「新収史料紹介」を参照されたい。

## ○史料の所在調査

滋賀県マキノ町在原区有文書他と長野県埴科郡戸倉町坂井家文書の二件について実施した。その詳細は本号「史料所在調査報告」を参照されたい。

## ○史料目録の所在調査

本年度の標記の調査は、次の各機関を対象に実施した。

県立長野図書館・愛知県文化会館愛

知図書館・名古屋市立鶴舞中央図書館・

岐阜県立図書館・岐阜県歴史資料館（二

月一九日～三日、深川美枝子）

広島県立図書館・広島大学附属図書

館・広島市立中央図書館（三月四日～八

日、林宏保）

北海道立文書館設立準備室・北海道

大学附属図書館・北海道立図書館（三月

一日～一六日、山田哲好）

## ○評議員会の開催

本年三月一五日に国文学研究資料館

評議員会が開催され、昭和六〇年度事

業計画等についての議事が評議された。

## ○運営協議会の開催

本年三月一日に国文学研究資料館運

営協議員会が開催され、昭和六〇年度

事業計画等についての議事が協議され

## ○近世史料取扱講習会

昭和五九年度の講習会は昨年一〇月

一日～五日、京都会場（京都府立総合

資料館）、同一〇月一五日～一八日、東

京会場（当館）で開催された。

昭和六〇年度の講習会は次の通り開

催する予定であり、詳細については追

て発表する。

一、昭和六〇年一〇月一四日～一八日、於

京都府立総合資料館

二、同年一〇月二八日～十一月一日、於国

文学研究資料館

## ○定期刊行物の発行

1 「史料館研究紀要」第一六号を刊行。

2 「史料館所蔵史料目録」

第四〇集「信濃国松代眞田家文書（その

三）」・第四一集「信濃国埴科郡松代伊勢

町八田家文書（その二）」・第四二集「武

蔵国多摩郡蔵敷村鈴木家文書」を刊行。

3 「史料館叢書第七巻」依田長安一代記

（東京大学出版会）を刊行。

4 「史料館報」第四一号（五九年九月、

第四二号（本号）六〇年三月）刊行。

## ○館内研究会

第八三回（昭和59・9・4）

閲覧利用のあり方 広瀬 睦

第八四回（昭和59・10・23）

在外研修報告 安藤 正人

第八五回（昭和59・11・22）

町方史料と目録編成 鶴岡実枝子

第八六回（昭和59・12・11）

村方文書と目録編成 安澤 秀一

第八七回（昭和60・1・22）

「藩史料」の目録編成 笠谷和比古

第八八回（昭和60・2・28）

毛利家文庫の全貌と中国地方の史料

所在状況 広田 暢久

## ○海外出張

安藤正人が文部省短期在外研究員とし

て昨年八月一日～九月三〇日の二カ月間、

英・仏・西独・米の四カ国へ出張。研究課

題は「文書館（Archives Repositories）」

における史料保存利用システムの研究」。

安藤秀一が史料館国際会議およびプレ

コングレス・セミナー出席のため、昨年九

月四日～二十九日の三週間、西独ボンへ出

張。

## 訂正とお詫び

前号の評議員会記事のうち、土田直鎮氏の氏名が上田と誤植していました。ここに謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

## ◎閲覧業務停止のお知らせ

書庫内燻蒸、蔵書点検の実施にともない、左記の期間の閲覧を停止する予定です。お知らせいたします。

四月二二日（月）～五月六日（月）

## 史料館報 第四二号

昭和六〇年（一九八五）三月三〇日発行  
編集・発行 (千一四三)

東京都品川区豊町一ノ一六ノ一〇

国文学研究資料館内

国立史料館

印刷所 電話〇三（七八五）七二二（代）

東京都文京区小石川一ノ二ノ七

勝美印刷株式会社